

今東光和尚と

団塊の世代

石河亮平

一 八尾の異色文化人

歴史を本当に学んだのは社会人になってからだ。歴史の先生は司馬遼太郎であり「世に棲む日々」「竜馬がゆく」「空海の風景」などが教材になった。出張の前後には必ず読んだのが「街道をゆく」シリーズだった。「日本人を考える」「風塵抄」などからも感情豊かな歴史を学ぶことができた。今は歴史の奥深さを楽しんでいる。



歴史の舞台に足を運び、その土地の歴史、気候風土、地理、産業経済、生活習慣、発展過程などを知る。歴史に登場した人たちが何を考え、何を作っていたのかと、思いをはせる。郷土史から「次世代のまち」を考えると、市民が郷土に誇りを持ち愛着を持つて、積極的に活動す

る意識の高い市民の存在がキープポイントになると思う。我が郷土を自負する市民が増えているのは嬉しい。

今東光資料館はテーマを決めて、企画展示にこだわる。(写真は「今東光の波乱の人生と交流した人々」展) ベールに包まれていた歴史的事実が解明されることも多い。八尾市の「由義寺の塔の基壇」は平成三十年に国指定となった。同時に千三百年前の称徳天皇と弓削道鏡を現在に呼び戻した。

弓削道鏡といえば今東光である。小説「弓削道鏡」は日本の正史である『続日本紀』の七百七十年のところに記されていた称徳天皇と道鏡が建立した由義寺をモチーフに、八世紀の河内の原風景を、出家、天皇との出会い、河内国へ、繁栄、そして別れまでをドラマチックに描く長編古代史小説である。

三十六回直木賞受賞の「お吟さま」は千利休の娘・吟の悲恋もの。お吟の心の内を河内出身の侍女に語るのも河内愛だ。昭和二十六(一九五二年)年に「単身赴任し、住んだのが「天台院」(八尾市西山本町)。

八尾周辺の庶民たちとの交際を通じて描いた「小説河内風土記」は母娘の細腕繁盛記をユーモアとお色気を交え人情味たっぷり。読み手を魅了する。七十九年の生涯を通じて出会った交遊は政治家、音楽家、画家、映画俳優、作家など。多彩な人脈相関図は華麗そのも

のだ。

社会人になった頃(一九六二年)の今東光旋風は半端ではなかった。この時代の男たちは、ラジオや週刊誌などで政治や社会の不条理さを今東光の毒舌放言でうっぶんを晴らしていた。最も忙しかった時にお色気談義などで、今でいうストレスを吹き飛ばしてくれたものだ。歴史と小説の面白さと男女関係や人間関係の処し方を教えてくれた。私にとれば、司馬遼太郎を「硬派」とすれば今東光は「軟派」だった。

直木賞作家であり仏教学者であり、画家、易学者、参議院議員のほか天台宗のえらいお坊さんにもかかわらず俗世間では「エロ坊主」「生臭坊主」と呼ばれても我関せず、怖いものなしの歯に衣着せぬ毒舌家である。敵も多かった。あまりにも博覧強記ぶりに誰も抗うことができなかつた。

「今東光 毒舌日本史」(文春文庫 昭和四十七年六月)のあとがきで、対談を行った文藝春秋社の池島信平社長(当時)は「七時間の対談はヘトヘトに疲れた。物凄まじいまでの博学と雄弁に圧倒され続けた」と振り返り、「自由闊達、云ってみれば少年の自由画のような奔放な線で書き上げたものだが、意外に歴史の深奥を衝いて、正しい図形が出来上がっていると思う」「たいへんな坊さんである」と記している。

さて、執筆時の今(令和二年九月)は、年初に中国湖北省武漢市で発見された新型コロナウイルスの世界的大流行(パンデミック)の真っただ中である。世界の感染者数は令和二年九月十八日時点で三千万人を超え、累計死者数は約九十四万人。日本では七万七千人が感染、死者約千五百人と収束の兆しは見受けられない。

このような中、七年八か月の長期政権を記録した安倍晋三首相は持病悪化で突然辞任。九月に菅義偉首相（七十一）が誕生。米国大統領選を控え国際的にもコロナと米中新冷戦のなかで、わが国は内憂外患、困難の時にある。

「忠君愛国坊主」（大宅壮一）に現況をどう思うかと聞けば「なんの研究も知識もなくは齒もたつめえ。俺は世の中で馬鹿ほど嫌いなもんはねえんだよ。女だってそうだよな。いくら別嬪でも馬鹿じゃ男も相手にしねえやな。馬鹿な野郎なんてもんはぶつ殺してやるのが社会のためなんだ」とボロクソだろう。

二 今東光とわが青春時代

昭和二十二（二十四年）（一九四七～一九四九年）生まれは、「団塊の世代」と呼ばれ現在約八百万人。やがて彼らは一斉に七十五歳を迎える。一九六〇年後半から八〇年代の高度経済成長時代を通じてバブルとその終焉を経験した世代だ。二〇二〇年での年齢は七十一～七十三歳である。彼らの青春時代のど真ん中に今東光が存在していた。団塊世代層を広くとらえ、取材しながら歴史・風土・文化・気質・社会・人間性が時間の経過で埋没した「本当のところ」を探ってみた。

人間味豊かな河内人を描いた

八尾生まれの生粋の八尾人間、広瀬和彦さん（七十五）は郷土の歴史・文化の保存・継承に強い関心を寄せる。今東光について「一般的に河内地方をガラの悪

い地域だと日本中に言いふらした生臭坊主、エロ坊主などとレッテルを貼られているとおりの」と認める。しかし「河内ものの短編や歴史もの、随筆などを読むにつけ、これほど河内や八尾を愛し、それを文章に著した人はいたのだろうか。深い知識に裏打ちされた歴史小説や幅広い人脈に驚かされました」と見直しの弁。

「男はみんな助平、東光はそれを包み隠さず、あからさまに表現して、むしろ人間味豊かな河内人を描きました。地主と小作や河内木綿の織子と問屋の関係、地場のブラシなども見事に描いています」とお気に入り「小説河内風土記」を語った。「東光の小説は純文学ではなく大衆小説として喝さいを受け、『毒舌』だの『エロい』などが独り歩きしました」と指摘。「五十年経って、改めて読み返すと、それは河内、とりわけ八尾地域の青春期の思い出」と締めくくった。

辻説法を聞きたいものだ

中学生のころに観た映画「悪名」に強烈な影響を受けたという高石市のNさん（七十二）。

「勝新太郎扮する男・朝吉親分のカツコよさだけは記憶にある。私の記憶にある和尚はテレビやラジオなどで、ずいぶんと豪放磊落な和尚というイメージでした」との印象が、「なんのなんの『悪名』を読んでみて、その描写手法は繊細かつ粘っこく、神経の細やかさを隠すイメージを自作していたのかと納得したものです。男としての価値観を『生まれた限りは男を磨いてかくあるべき』といった理想像を主人公の朝吉親分に託して物語が進みます。戦後間もない頃の和尚が持つ価値観は、我々世代には通用するが、草食系や肉食系と揶揄されている今の男たちがこの小説を読んでも全く理解できないでしょう。和尚が生きていれば、今の世の

中をなんというだろうか。一度、説法をきいてみたいものです」と当時を振り返った。

「こつまんきん」と「武蔵坊弁慶」

大学時代に初めて今東光を知った茨木市の池部喬さん（七十二）は先輩の下宿部屋で「こつまんきん」の表紙カバーに土偶のような女の裸の絵をみて身体が火照ったと言う。「これはエロ本か？」「アホいえ、河内に住んでいるえらい坊さんやで、直木賞作家や」と教えられた。「勝間村（こつま）産の南京は小ぶりだが身がしまつてええのや」「トランジスタグラマーですわ」と。「お市の流転の人生を通じて男と女がいかに結ばれるのか、ワクワク、ドキドキしながら読んだ。男気があつて一本気な女好きの八尾の朝吉親分の映画も今東光」だと先輩から教わった。

子供と図書館通いの時に「武蔵坊弁慶」を見つけ、「わが家へお連れして以来、今東光は風俗作家から歴史学者に変貌です。各地の歴史や人物についての詳細な現地調査」に驚き、今東光自身の言葉を引いた。「歴史を伝えるのは、歴史小説家の役目である」と。

「悪名」シリーズとともに育つ

昭和二十五年（一九五〇）生まれの鈴木豊さん（七十）も映画「悪名」を語る。

一九六一年に、八尾の朝吉親分を題材にした「悪名」がシリーズ化され中学三年生の時に阪神尼崎の映画館で鑑賞し、勝新太郎と田宮次郎のコンビが世の中の理不尽と戦う姿に感動したのを覚えていると昔話。この映画のコンセプトは任侠道の「弱きを助け強きを挫く」精神と「義理」「人情」を合わせ持った男の話」だと語る。その後、「任侠ものブームとなり、肩で風を切って

映画館から出てくる姿を何度も見たことから自然とこれらの精神を自分の中に取り込んだ」と話す。小説「悪名」のコンセプトは「一つの道しるべとして世間に浸透し、全員で助け合うという精神を持った勤勉な企業戦士や猛烈社員を生み出し、日本の高度経済成長を加速させる原動力になった。私は一九六八年に高校を卒業し大阪の会社に就職、良き時代に、良き会社に入社し青春を謳歌できた」と悔いなき青春に感謝する。

高知の「こつまんさん」

昭和四十三年（一九六八）にS電機本社に入社した山田和紘さん（七十七）は営業の最前線にいた。

事務部門から手を挙げ販売部門に異動した。軽トラックで技術者と組んで販売店を回る役だ。担当の販売店を泊旅行に招待した時のエピソード。「宴会では酒をすすめる係で、忙しくてくたくたになった。皆、二次会へ。疎かにできない変な悪習慣」だった。そこへ「仲居さんから『疲れたでしょう、息抜きに行つてみては』と一枚のメモ。新米二人で行くと、高知の『こつまんさん』が待っていた。アホ臭さが解消された。これは経費処理できなかった」と回顧。時を経て、「海外営業を担当するが、日本的義理人情的商売とは無縁となり、国内販売が懐かしくなった。コロナ禍で商売はテレワーク、味気ない砂をかむような温もりの無い価格とスペックだけの商売になっているのではないかと危惧する。

朝吉親分と河内音頭大好き

今東光と河内音頭が大好きという愛知県赤松正康さん（七十八）は「河内音頭は、歌手では、本家は鉄砲光三郎（平成十四年没）、中村美津子でしょう。小生

十八歳頃に民謡鉄砲節覚えましたが、今でも生オケでいける」と言うコテコテの八尾ファン。天台宗僧侶、瀬戸内寂聴さんの師、直木賞作家で河内の生臭坊主「ぐらいは知っていると云うが映画「悪名」になると饒舌になる。

「悪名シリーズを観たのは二、三本程度。朝吉親分は下駄に着流し、清次は旧軍服に近いスタイルだったと思います。なんととっても朝吉親分は正義感の塊りそのもの。悪は徹底的に倒す、武器は下駄とげんこつだけ。破れかぶれでどんな場合でも命がけ、みていて痛快そのもの。シルクハットの親分や女大親分の浪花千栄子の迫力のある演技が印象的でした。正義は良い、それと何事も命がけでやる、命なんぼあっても足らんとお思いでしょうが、やる以上は自分のできる範囲でせい一杯行動する気持ちが必要ですよ」と老いを感じさせない。今東光の名言集から全くその通りだと引用したのが「人生なんて、あくまでその人の人生であつて客観的な価値なんていうものはあり得ないんだ」

河内音頭か天童よしみの八尾

取材の最後に八尾育ちの写真家・旅行作家の野田裕子さん（三十五）に寄稿してもらった。

今東光さんが私の人生に登場した鮮明な記憶は大学の卒業論文を書いている時だった。『八尾市の市街地の変遷』と題して、人文地理学の角度から地図を用いて八尾市の歴史を書いていた時に、別のゼミの教授が「君は八尾市出身なら、今東光さんのことはかかなければ」と言われ「そういえば今東光さんは八尾にいたと聞いたことがあったな」という具合だった。生まれてからずっと八尾に住んでいるので、「今東光」という名前は聞いたことはもちろんあったし、父の祖父であり私の

曾祖父の葬式にあの「八尾の朝吉」さんが来てくれたというエピソードによって、朝吉さんが実在する人物であったことや、それが今東光さんによって書かれた小説の登場人物であるとは知っていた。「八尾出身です」と他府県で言おうもんなら「やれ今東光だ、やれ八尾の朝吉だ」と言うのは決まってる、映画「悪名」によって八尾を知った年配の方々だ。しかし、私にはピンと来ない。

八尾と言えば「河内音頭でしょ？ 天童よしみでしょ？」と思ってしまうのだ。大人になってから、今東光さんと言えば、瀬戸内寂聴さんの師、川端康成さんに戒名を贈った人というイメージを持ってしまい、そこまで身近に感じられないほど大きく遠い存在だと思つているからかもしれない。まさか八尾に住んでいたなんて、そう聞かされていても想像もできないからだ。そして、八尾で文字を紡ぎだして暮らしている私が今東光の作品をほとんど読んだことがないのは非常に恥ずかしいことだ。

取材を終えて

八尾の老舗和菓子店のオーナーは「よくお茶に寄られました。実に優しい立派なお坊さんでしたよ」と懐かし気に話した。

偉人には光と影が付いて回る。今東光和尚は影の部分が一般的に「表」である。つまりマイナスイメージが強烈なのだ。地元では「生臭坊主、ガラが悪い、エロい、恥ずかしい」と言う。すごく偉い坊さんだったのに残念である。古代の高僧・弓削道鏡が活躍した八尾の地に赴任して来たことは「縁（えにし）」だろうか、叶わぬまでもひそかに憧れ、自分を道鏡に重ねていたのだろう、と考えるのも歴史の面白さだ。八尾は古代

から聖地であり国の中心であった。由義寺を中心にした歴史公園誕生が楽しみだ。

時間の経過とともに噂や伝聞などが「悪貨が良貨を駆逐する」かのように広がるのを払拭したいと思いい取材を試みた。東大阪新聞記事で光の部分濃くしたい。拙稿が話題提供になれば嬉しい。

団塊の世代の青春は、和尚が八尾市に在住していた一九五一年〜七十五年の二十四年間に重なる。エネルギーが溢れ、若者特有の人生でぶち当たる悩みには極道辻説法などの「身上相談」ではまさに快刀乱麻、世の中の理に沿わぬことは一刀両断。天下に怖いものなし、縦横無尽に毒舌を吐きまくった。それで若者たちはすつきりさせられ鼓舞されて、大人になっていった。特に映画「悪名」の影響は大きかったことが取材からもわかる。義理人情浪花節（GN）の世界が広がり知的野性味を持つ世代がいたことだけは確かだ。

三 東大阪新聞 取材記事から

今東光没後四十年・今東光資料館開館三周年

今東光の波乱万丈の人生と交流した人々

河内・八尾をこよなく愛した作家・今東光資料館（八尾市立図書館内）が開館三周年を迎えた。今東光は昭和二十六年（一九五一年、五十三歳）に現在の西山本町の天台院の特命住職として赴任し二十四年間、八尾市に在住し作家活動を続けた。「お吟さま」（三十六回直木賞受賞）をはじめとして「鬮鶏」「みみずく説法」「河

内風土記」「こつまなんきん」「悪名」「弓削道鏡」など数々の作品は映画・劇化もされ一世を風靡した。一九五七年には第一回八尾市文化賞を受賞した。

今回は没後四十年の節目にあわせ、今東光の異才異能ぶりを象徴する交友関係が目玉企画だ。同時に新しく「八尾の歳時記コーナー」が設けられた。小説河内風土記の記述と写真で昔日の風景が立体的に蘇る構成となっている。青春時代を今東光和尚と呼び親しんだシニア層の来館が目立つ。なかにはリピーターも多いと言う。テーマに沿いすつきりとしたレイアウトは居心地の良い空間を醸し出していた。

今東光が出会った人々

今東光（一八九八・一九七七）は谷崎潤一郎を生涯の師と仰ぎ、菊池寛に誘われて「文藝春秋」創刊（一九二二）に参画、翌年「文藝時代」創刊に川端康成、横光利一などと参画する。七九年の生涯を通じて出会った人々との年代別交遊。パネルは佐藤春夫、東郷青児、山田耕筰、芥川龍之介、板東妻三郎などが登場する一九二〇年代から始まり一九六〇年代の田辺聖子、勝新太郎、森繁久彌、野坂昭如、藤本義一、永六輔らまで十年毎に刻まれている。天台宗僧侶、直木賞作家、画家、易学者、参議院議員などの顔を持ちテレビ出演するなど、多彩な才能を發揮し活躍した。文壇のみならず宗教家・政治家・画家・俳優など幅広い人物との交流を紹介するコーナーは昭和史でもある。シニア層には感慨もひとしおだろう。

三つの新しい試み

一つ目は「八尾の歳時記コーナー」の新設である。今東光が「河内風土記」で「・・・母が出盛ると嘉助

はそれを集荷して家に運んだ。（中略）箱が出来上る傍で妙が母を一粒ずつ選んで箱詰めにした」との描写にあわせて、「恩智いちご」の収穫風景写真がある。写真家・田中正太郎が撮影した八尾の歳時記との並行展示。当時の景色を効果的に演出している。

二つ目は直筆原稿（写真）の展示である。産経新聞から提供された「東光太平記」のもので推敲の跡が生々しい。大きな展示パネルは立ち読みができるように工夫されているのでありがたい。

三つ目は子ども向けの「今東光なるほどクイズラリー」である。「どれ位知っている？」とクイズで答え、記念品がもらえる（先着百名）「まちライブラリー」関連企画。五月二十八日までの間、子どもたちに面白く学び親しんでもらおうというもの。

もう一度、観たい、読みたい

資料館入口に「河内カルメン」「河内フーテン族」「悪名桜」など、レトロな縦長の映画ポスターが並ぶ。勝新太郎と田宮二郎の「悪名シリーズ」をもう一度観たいという人も多い。今東光の作品をもう一度読みたいが殆どが絶版だ。このような来館者の要望に「映画上映の企画はありますがコストの問題で実現は難しい」、また作品を読みたい人には「八尾図書館には大半はそろっています」と話す資料館の岡本俊樹さん。同氏は「来館者は一日平均十五人ぐらい。六十〜八十歳の方が多く天台院周辺の人や交流のあった人、週刊誌「プレイボーイ」を読んでいた世代の人、また、田宮二郎をロケで見たと言う人もいます。東京や茨城、鳥取からも来られました」と語った。

秋の企画は「弓削道鏡」と由義寺

九月の企画として今東光著「弓削道鏡」（文藝春秋一九六〇年刊）と「幻の寺」（由義寺）が準備されているようだ。今年二月、八尾市教委は市内の東弓削遺跡から巨大な塔の基壇（土台）が確認されたと発表。称徳天皇と道鏡が建立した由義寺の存在が明らかになり歴史的大発見となった。古代の八尾を舞台に「弓削道鏡」を創作した今東光の洞察力に驚く。古代・八尾へいざなう企画は没後四十年記念にふさわしい。郷土の歴史に大きな足跡を残すものになり注目を集めることだろう。（東大阪新聞平成二十九年五月一日掲載）

生誕百二十年周年記念 秋季企画展示

直木賞受賞作品 小説「お吟さま」の生きた時代
初公開 直筆の原稿

現在、今東光資料館（八尾図書館三階）では秋の企画展示として今東光が第三十六回直木賞（昭和三十一年度）を受賞した小説「お吟さま」を題材に、当時の時代背景などを紹介している。平成三十一年三月十日まで（入場無料）

今回の展示では二つの見どころがある。一つは、今東光の推敲のあとが生々しい「なま原稿」が特別出品されていることだ。昭和三十一年（一九五六）に茶道裏千家の機関紙「淡交」で一年間連載された直筆原稿を元編集者の遺族から今年四月に寄贈を受けた貴重な資料である。

もう一つの見どころは「河内キリシタン」の歴史だ。企画を担当した広瀬和彦さん（七十三）は「一五四九

年から一五九八年の五十年に着目すると意外なことが分かります」と年表を前に話した。「当時、河内地域のキリシタンは長崎・熊本へと移住した」との記録もあると言う。

一五四九年にフランシスコ・ザビエルが鹿児島へ、キリスト教を広めに来た。本能寺の変（一五八二年）を経て、豊臣秀吉は関白（一五八七年）となりバテレン追放令を出した。同年、千利休との京都北野の大茶会を催すなどして秀吉は一五九八年に没する。これまでの五十年の年表は興味深い。高山右近は一六一三年にルソンへと追放され、翌年マニラで生涯を閉じた。二〇一七年、高山右近はローマ法王から「聖人」の次に高い「福音」に認定された。

小説「お吟さま」は千利休の娘・吟（実際は松永弾正久秀が父）が幼なじみのキリシタン大名・高山右近を慕い続けたが妻ある身では叶わぬ悲恋物語。北野の茶会で吟の美貌に恋慕する秀吉や、三成などの陰謀が交錯する中、高山右近との逢瀬が白日の下に・・・という物語。河内出身の侍女がお吟の心の内を語るという形式で描かれている。（東大阪新聞平成三十年十一月一日掲載）

今東光資料館 第九回 秋季企画展示

今東光が僧侶、作家として遺した
『平泉 中尊寺』直筆原稿 初公開中

現在、岩手県平泉天台宗東北大本山中尊寺貫主を拝命し寺の復興に尽力した今東光の企画展が開催中である。特に「平泉中尊寺」（淡交社）の直筆原稿の展示は

一見の価値がある。令和二年三月八日まで開催（入場無料）。以下記事より抜粋

今回の企画は、平成二十三（二〇一一）年に世界遺産に登録された奥州平泉・中尊寺貫主を昭和四十（一九六五）年、六十七歳の時に拝命した今東光にスポットをあてたもの。住み慣れた河内・八尾を離れ奥州平泉へ。かつて奥州藤原四代におよぶ栄華を極めた地であり、絢爛たる仏教文化（美術）をもつ宗教拠点でもあった。

見どころは、一つは直筆原稿の展示である。二つ目は資料館オリジナルの「藤原四代による栄華が出来るまでの年表」。三つ目は河内源氏とのかかわりだ。河内源氏は「あまり知られていないが今の羽曳野市あたりを支配していた」四ツ目は今東光が中尊寺復興と蝦夷への思いを伝えるもの。

平泉と八尾が河内源氏を介して、今東光著の「平泉中尊寺」によつて繋がったのも「縁だろう」。（東大阪新聞令和元年十一月十五日掲載）

（東大阪新聞読者友の会）

今東光資料館（八尾図書館三階） 入館無料
開館時間 午前十時～午後五時
休館日 月曜日（祝日は開館）、年始年末（十二月二十九日～一月四日）その他（展示物の入替時）
住所 〒五八一・〇〇〇三 八尾市本町二・二・八
☎〇七二・九四三・三八一〇